

いわゆる「可能」の助動詞 「ゆ・らゆ」の構文論的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹田, 美喜 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-225

Title	いわゆる「可能」の助動詞 「ゆ・らゆ」の構文論的考察
Author	竹田, 美喜
Citation	文学史研究. 14 卷, p.52-61.
Issue Date	1973-07
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

いわゆる「可能」の助動詞 「ゆ・らゆ」の構文論的考察

竹 田 美 喜

本稿は、いわゆる「可能」の助動詞といわれている「ゆ・らゆ」について、構文論的考察を試みようとするものである。

「可能」といえば、その表現形態は多種あり、大別すると、発生的に「自然的実現」の概念をもっている自発系の可能表現形態（ゆ・らゆ・る・らる・なる・できる・可能動詞等）と、困難であるという婉曲的に不可能を表現する可能表現形態（にくし、がたし等）の二類にわけられるが、自発系の可能表現形態が、可能表現の大半をなしている。

ところで、「る・らる」における可能表現（「自発」は含まない）を見ると、否定辞に接続する例が非常に多い。表①は狂言本で近代Ⅰの末、表②は近代Ⅱ、表③は現代である。表①表②表③を見てもわかるように、「る・らる・（るる・らるる・れる・られる）」において、否定形つまり、否定辞接続の例は、時代が古くなるほど多く、現代に至るほど少くなっている。たとえば、表①では六八・七%表②では七〇・七%が否定辞に接続しているが、表③になると、

肯定形が多くなってきた、否定辞接続は五七・一%と一〇%前後減少しているのである。このように、否定辞に接続して不可能を表わす用例が、時代をさかのぼるほど多くなるのは、「る・らる」だけではない。「虎明本」に主にみられる「なる」による可能表現や、近代Ⅱの末からみられる「出来る」による可能表現も、初期においては否定辞に接続して不可能を表わす用例だけである。これらから、先にいった自発系の可能表現は、発生的には否定辞接続の不可能の形態だったのではないかと推測される。

山田孝雄氏、橋本進古氏、林和比古氏、岩淵匡氏は、近代Ⅰ（鎌倉期）まで「可能」の「る・らる」は否定辞接続の例しかみあたらないことを指摘されている。

作品		可定の「るる・らるる」		るる		らるる	
				肯定	否定	肯定	否定
天正狂言本（全104番）	天正 6	4	2				2
虎 清 本（全 8 番）	天保 3		8				2
虎 明 本（内130番）	寛永19	12	26	10	17		
	計	16	36	10	21		
	%	19.3%	43.4%	12.0%			

〈表①〉

「る・らる」は「受身・自発・可能・尊敬」を表わすが、なぜ「可能」だけが頑固に否定辞に接続しつづけたのか。否定辞に接続することが、「受身」でも「自発」でもない「可能」を表わすことにとのように関与するの。もちろん、否定辞に接続するものがすべて不可能を表わしたということではない。否定辞に接続するもののうち、ある一群が不可能を表わすのである。

可能の「るる・らるる」			るる		らるる	
作品			肯定	否定	肯定	否定
ESOPONO	FABLAS	文録2	1	2	2	3
伊曾保物語		慶長元和頃		2		
恨の介		元和初年頃		2		1
頼光跡目論		寛永頃		3		
初庚申楽遊		延宝7		2		
枕久浮世十界		貞享3	1	2		
好色万金丹		元祿7	2	8	5	2
心中天の網島		享保5	1	9	0	4
幼稚子飲討		宝暦3	2	4	4	3
遊子方言		明和7	2	4		
卯地臭意		天明3			1	
孔子縞干時藍染		寛政元				3
傾城買二筋道		寛政10	3	2		2
浮世風呂(前)		文化6	1	6		
春色梅児誉美(初)		天保3	1	4	3	2
		計	14	50	15	20
		%	14.1%	50.5%	15.2%	20.2%

〈表②〉

古代では、この「る・らる」の職能をいわゆる助動詞「ゆ・らゆ」がになっており、「可能」の「ゆ・らゆ」はやはり否定辞に接続して不可能を表わしている。本稿では、このいわゆる可能の助動詞「ゆ・らゆ」に関して、否定辞接続の事実が構文論的にはどのよう理解されるものか考えてみたい。

可能の「れる・られる」		れる		られる	
作品		肯定	否定	肯定	否定
安慮楽鍋	明治4-5	2	6	1	10
牡丹灯籠	明治17	4	12	11	20
浮雲	明治20-40	11	10	8	26
たけくらべ	明治28	1	7		3
牛肉と馬鈴薯	明治34	1			1
家	明治43	13	14	22	13
雁	明治44	3	20	9	19
芋粥	大正5	3			2
カインの末裔	大正6	2		1	6
蓼喰ふ蟲	昭和4	5	1	23	18
雪国	昭和10-22	1		8	14
風立ちぬ	昭和11-13	4	10	24	9
斜陽	昭和22	3	6	3	7
仮面の告白	昭和24	8	4	23	17
太陽の季節	昭和30			1	4
死者の奢り	昭和32			2	4
十年の後	昭和40			5	6
	計	61	90	141	179
	%	13.0%	19.1%	29.9%	38.0%

〈表③〉

いわゆる「受身・可能・自発」の助動詞「ゆ・らゆ」を、時枝誠記氏は辞の範疇から除外し、動詞的接尾語とされるのであるが、ここでは、まず、萬葉集からいわゆる助動詞の「ゆ・らゆ」及び、接尾語「ゆ・らゆ」を抽出する。その際、訓みの正確さをきすため、巻五・十四・十五・十七・十八・十九・二〇のうち、一字一音表記される例のみを選ぶ。「越ゆ」25例、「越ゆ」2例、「絶ゆ」32例、「映ゆ」2例、「燃ゆ」5例、「しなゆ」1例、「思はゆ」1例、「もはゆ」1例、「思はゆ」23例、「見ゆ」45例、「聞こゆ」5例、「泣かゆ」7例、「さかゆ」8例、「にはゆ」1例、「厭はゆ」1例、「ころはゆ」1例、「知らゆ」1例、「惚はゆ」1例、「憎まゆ」1例、「忘らゆ」4例、「寝らゆ」4例、計17例である。

このうち、受身の例は3例。

十四 3529 とやののに をさぎねらはり をさをさも ねなへこゆゑ
にはに許呂波要

五 804 ……こしにたがねて かゆけば ひとに伊等波延 かくゆ
けば ひとに邇久麻延およしをは かくのみならし……

いわゆる「可能」の助動詞「ゆ・らゆ」は、8例で、すべて否定辞に接続し不可能を表わす。

二〇 4358 わがははの そでもちなでて わがからに なきしこころ
を 和須良延ぬかも

二〇 4407 ひなくもり うすひのさかを こえしだに いもがこひし
く 和須良延ぬかも

二〇 4482 ほりえこえ とはきさとまで おくりける きみがこころ

は 和須良由ましじ

五 853 あさりする あまのこどもと ひとはいへど みるに之良

延ぬ うまひとのこと

十五 3665 いもをおもひ いの祢良延ぬに あかとき あさぎりこ

もり かりがねそなく

十五 3678 いもをおもひ いの祢良延ぬに あきののに さをしかな

きつ つまおもひかねて

十五 3680 よをながみ いの年良延ぬに あしひきの やまびことよ

めさをしかなくも

十五 3684 あきのよを ながみにかあらむ なぞここば いの祢良要

ぬもひとりぬればか

「らゆ」の用例は、「いのねらえぬ」の慣用句を作る例だけである。これら、11例を除く、他の10例は、「おのづから成る」意であり、自動詞を作る接尾語（阪倉篤義氏に従えば、「越ゆ・越ゆ・絶ゆ・映ゆ・燃ゆ・しなゆ・見ゆ・もはゆ・思はゆ・聞こゆ・さかゆ・にはゆ」の類の「ゆ」、及び、「自発」の助動詞「思はゆ・泣かゆ・惚はゆ、忘らゆ」の類のゆ）といわれるものである。このように、「おのづから成る」意を原動詞に付加する点からみると、「ゆ・らゆ」は、発生的には、「自然的実現」という概念をもったものと考えられる。「自然的実現」とは、超意志のものであり、客世界、主世界共に起りうるものである。従来の「ゆ・らゆ」を助動詞と自動詞の接尾語に分類する根拠は、前者が、動詞の未然形に接続し、「受身・自発・可能」を表わすのに対し、後者は、「燃ゆ・絶ゆ……」などのように、原動詞と一語意識（これもきわめて不明瞭な規定だが）で認識され、自発だけを表わすという差によるものである。

らしい。

今、この分類の枠をはなれ、「自然的実現」を場面つまり客体界、主体界における「実現」においてみるなら、次の四者にわけられる。

①客体における自然的実現（聴ゆ、映ゆ、しなゆの類）

②客体から主体への志向における自然的実現（見ゆ・聞ゆの類）

③主体から客体への志向における自然的実現（思はゆ・忘らゆの類）

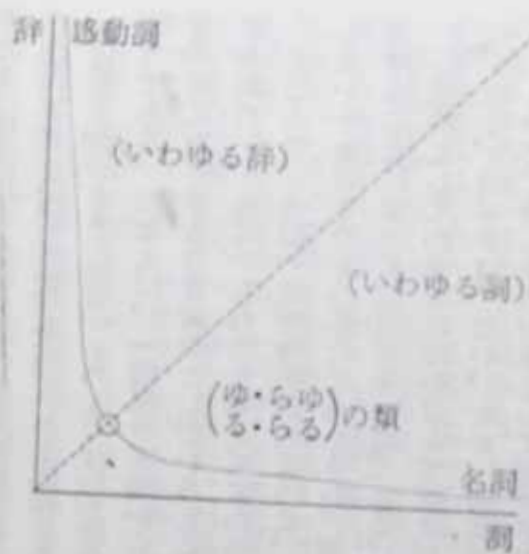
④主体における自然的実現（泣かゆ・寝らゆの類）

これら四類の「自然的実現」は、その実現が客体においてであろうと、主体においてであろうと、客観的な実現であるという点ではかわりがなく同一であり、主体の意志判断に全く関与しないものである。いわゆる自動詞の接尾語「ゆ・らゆ」が①②にあたり、助動詞「ゆ・らゆ」が③④にあたるが、①は客体界において、③④は主体界において実現するという違いがあり、②は主体界における時と、客体界における時がある。①の「見ゆ・聞ゆ」の類は、時枝氏も『日本文法』(82頁)で述べられているように、

元来、「きこゆ」は、音の出る事実と、音を耳に知覚する事実とを、総合的に表現する語と考へられるから、知覚する側を主格とすれば、「耳に入って来る」意味となり、現象する側を主格とすれば、「音が出る」意味となる。この対応関係は、「見ゆ」にもあり、知覚を意味すると同時に、物が形を現す意味にもなる

と、現象する側にも知覚する側にも主格が考えられる語である。

3



2で「ゆ・らゆ」の発生的概念が「自然的実現」であるといったその「ゆ・らゆ」のうちに、いわゆる「可能」相を表わす「ゆ・らゆ」も属し、その場合必ず否定辞に接続しているわけである。この「可能」相を表わす「ゆ・らゆ」(いわゆる可能の助動詞「ゆ・らゆ」)を構文論的立場から考えてみる。

「ゆ・らゆ」の職能は、後世の「る・らる・れる・られる」の職能に対応するものである。ところでこれらの類は、その職能が他の助動詞と違ふところから、時枝氏のように辞から除外して詞の範疇に入れるという説もあるが、詞・辞連続の立場から言えば、時枝氏のように、これらの類を辞から断絶してしまうことは、この類の特異な面に固執するあまり、その本質を看過してしまっていると考えられる。詞・辞はいわば非連続の様相を呈しながら連続しているものであり、上図のようにX軸に詞を、Y軸に辞をとるなら、両者は

反比例の直角双曲線を描く。「ゆ・らゆ・る・らる」は同的要素の強いものと辞的要素の強いものとの中間に位置する。

また、助動詞の中にも同的要素の強いものから辞的要素の強いものまで差があることは、すでに指摘され(金田一春彦氏「不変化助動詞の本質(上・下)」『国語学』)

22卷2・3号)、その差が助動詞の承接順位に表われていることは芳賀矢一氏、橋本進吉氏、辺渡実氏など諸氏による卓論がある。そして、「る・らる・れる・られる」が、助動詞承接順位の中では上位に位置し、用言の機能を補足する詞的性格の強いものであることが明らかである。たとえば、口語助動詞の「れる・られる」に關してであるが、その機能を渡辺氏は、陳述・再展叙の他、次のようなものがあると言われている。

一、「せる」「れる」などの助動詞によって表わされる使役、受身などの意義内容は用言の素材概念を補足するものであり、二、統叙の機能は、用言がこれらの助動詞が下接した全体において託されるのであり、

三、その意味で使役、受身などを意義内と客する助動詞「せる」「れる」などは、統叙成分の一部としてはたらく助動詞である。

(「国語構文論」124頁)

「ゆ・らゆ」もやはりこの「れる・られる」と同じ機能をもつものであり、上接する用言の素材概念を補足して、統叙成分の一部として働くものであるといえる。先の「ゆ・らゆ」の四類のうち、自動詞にあたる(一)「燃ゆ・映ゆ」の類などは、最もこの機能が強く働いているものである。

さて、この「上接する用言の素材概念を補足して、統叙成分の一部として働く」「ゆ・らゆ」に下接する否定辞についてであるが、金田一春彦氏は、否定辞は、主観的要素つまり、否定や否定判断を含むものではなく、「ハ…が否定サレル属性ヲモツテイル(または、状態ニアル)」ということを表わす助動詞で、客観的な表現に用いられる助動詞だ(「不変化助動詞の本質(下)」24—26頁)とされる。

やはり、時枝氏も「非存在の事実」を対象とするといわれるが、「非存在の事実を、非存在の事実として表現する場合に用いられる判断」(「日本文法」131頁)と、そこに判断作用を考えられているようである。たとえば、「国語学原論」(211頁)では、「ず」を肯定判断に対立する否定判断としていっているところからも、「否定」を判断作用の一とみていられると考えてよからう。

ところで、金田一氏や時枝氏のように、客観的属性「対象が存在しない」とはどういうことであろうか。否定は、必ずその対象が存在することによって定立するものである。つまり

言語としての表現にはかならず対象がある。ナニナニがない、とか、ナニナニでない、とか、否定さるべき対象が言語表現をとって、話し手の対象として定立されなければならない。その否定には、右の「ナニナニがない」という存在を否定する表現もあるし、また「ナニナニでない」という判断「だ」相当に対する否定もある。(中略)「否定は存在以後の事であり、非存在に先行しない」ということは、ここにふたたびかえりみられなければならない。(宮地裕氏「否定表現」『文論』133頁)

ものであろう。「有り」が存在を表わす詞と考えられる場合と肯定判断を表わす辞と考えられる場合とがあると同様、否定辞も存在を否定すると考えられる場合と、存在の否定判断を表わすと考えられる場合とがある。しかし、どちらにしても、否定が存在に先行されることには変りがない。

つまり、「ゆ・らゆ」に下接する否定辞は、「ゆ・らゆ」によって提示された属性を否定する否定判断であり、「わすらえぬ」(二〇43頁)と考えられるものである。ところで、この上接する「わ

すらえ」の「え」が単独で「可能」の属性をもち、それを否定判断「ぬ」で否定して「不可能」だと結論することはできない。従来「ゆ・らゆ」による可能表現といわれるものは否定辞に接続する「不可能」ばかりであり、「る、らる」における可能表現も近代まで同様であることは先に述べた。この「え」は「自発」であり、上接する「わする」の統叙成分の一部として働き、叙述内容「主体における自然的実現」を表わす。つまり、「主体における自然的実現」を否定判断する、判断作用が加わって全く新しい「不可能」相が出現したのであり、これは、「可能」相を否定するという手続きによったものではない。つまり、「わすらえぬ」で「不可能」という属性をはじめて有するものであり、「え」は、決して「可能」という属性を有してはいないのである。否定辞がこのように、一旦は、客観的属性「主体における自然的実現」を否定しながらも、「不可能」相を出現させ、統叙成分の一部となって、叙述内容「不可能」を示すようになるわけであるが、これは、渡辺氏が「ない」などの第2類の助動詞について、「一旦は統叙成分の外ではたきはするものの、結局は統叙成分の一部にすぎないという二重性格をもつ。」（『国語構文論』100頁）といわれていることにもあたろう。

近代まで、このように「不可能」表現ばかりであったが、「不可能」表現が定着するに従って、否定辞が「可能」を否定しているのであると意識されはじめ、否定辞を用いない肯定の「可能」が出現するようになった。

「不可能」と呼ぶ格関係は、「自発」の格関係とかわらない。それにくらべ、「受身」の「ゆ・らゆ」は格関係をかえる。このような格関係からも、「自発」と「不可能」は、非連続でありながら、

緊密な連続を保っているといえ、両者の違いは、一つには否定判断をその統叙成分の一部としてしているか否かにかかっている。また、「ひとよには ふたたび美延ぬ ちちははを おきてやながく あがわかれなむ」（五・四）の「みえぬ」は「不可能」を表わしている例である。この「見ゆ」は「客体から主体への志向における自然的実現」に属し、この場合、主体における知覚つまり、主体界における自然的実現を意味している。「不可能」を実現する「自然的実現」を、先には(三)四のみをさし「自発」と称したが、厳密に言えば「主体界における自然的実現」のことをさす。

4

「不可能」は、連用修飾とどのような格関係にあるのかを考える。述語が、連用修飾（格関係）を要求するものであることは、それぞれ多少の違いはありながらも、三上章氏、三尾砂氏、渡辺実氏、北原保雄氏にいわれているところである。すでに、主語は述語である用言に含まれているものであり、それが表現される場合には、用言から抽出されたのであると、熊沢龍氏、時枝氏、加藤彰彦氏にいわれていたが、述語である用言に含まれているのは、一つ主語だけではないとされるのが、先の諸氏の御意見である。特に、三上章氏は、その立場から、いわゆる主語は、対格や位格などと横の関係にあって連用修飾の一であるから、「主語」という用語を廃止して「主格」とせねばならないとされた。

ところで、連用修飾の格関係を要求するものは、述語であるとか、述語となる用言であるとか、統叙素材であるとか、動詞語幹である

とかいわれているが、受身や使役が格に変化をもたらすことから用言、動詞語幹のみが、要求するものではないといえる。また、三上章氏は、長谷川欣佑氏の「主格も対格も動詞語幹に吸収される、しかもパラレルに吸収される。」とされる後者に不賛成で、決してパラレルに吸収されるものではないとされるが、やはり動詞語幹に吸収されるところでは同じである。このように格がパラレルに吸収されないのは、格が単に三上氏の如く動詞の語幹に呼応しているだけのものではないことを示している。格がパラレルに吸収されるものではないという立場から北原保雄氏は、

統叙は従来一つのものと考えられていたようであるが、けっして単一なものではなく、いろいろの展叙と対応するところのいろいろの種類の統叙があること、それらの配列には順序が定まっていること、その統叙の順序に従って展叙と統叙との関係がある……〔文の構造―展叙と統叙との関係―「月刊文法」昭和44年12月〕

といわれ、その基本構造を次のようにされた。



〔助動詞の相互承接についての構文論的考察〕「国語学」83輯）

これは、非常に整然とされているのだが、それだけに疑義が残る。

「なきし」ころを 忘れえぬかも」(二〇四三)における「不可能」

の「忘れえぬ」は「忘れえぬ」であることは前章で述べたが、これは「忘る」「忘れゆ」と同様対格「を」要求して

なきしころを 忘れえぬ

となる。北原氏の

太郎が本を読まれる

の如く、「本を読まれる」と動詞語幹「読ま」が対格を要求し、

「読まれる」は対格を要求しないとするのは、「れる」の職能からも納得できないものである。「読まれる」は「読む」と同様に、すな

わちここでは「忘れえぬ」は「忘る」「忘れゆ」と同様に、対格を要求するものであると考えねばならない。「きみがころは 忘れ

ゆましじ」(二〇四四)は、係助詞「は」による展叙で、「ころは

忘れゆましじ」であり、係助詞「は」は対格「を」を無形化して

介入したものである。「いの寝られぬ」(一五・3665・3678・3680・3684)

は、「いの寝られぬ」であり主格「の」を要求する。「いの寝ず」

(二〇・400)の「寝」は対格「を」を要求するが、「不可能」の

「寝られぬ」は主格を要求する格変化を起しているわけである。

受身の統叙は、「ははに ころはえ」(十四・3529)と、与格「に」

(北原氏は、この与格を特に「被格」といわれる)の展叙と関係する

が、「不可能」は与格を要求しない。「不可能」は、主格・対格

の展叙を要求する。主格と対格の展叙を要求するところは、「自発」

と同じである。

5

以上、いわゆる「可能」の助動詞「ゆ・らゆ」を構文論的に考察してみたが、いわゆる「可能」の助動詞といわれる「ゆ・らゆ」は実は単独で「可能」相を表わすことはなく、「自発」の助動詞とい

えるものであること、つまり「主世界における自然的実現」(二)(三)(四)にあたる)といえるものにおいて「不可能」相が実現し、それは「主世界における自然的実現」に否定判断という判断作用が加わるものであること、この「不可能」の有する統叙は、主格、対格の展叙を要求するものであることなどが指摘できるものである。

注① 時代区分は、諸説あるがここでは「講座国語史」(大修館)の次の時代区分によった。古代Ⅰ(奈良時代以前)・古代Ⅱ(平安時代・院政期を含む)・近代Ⅰ(鎌倉・室町時代)・近代Ⅱ(江戸時代)・現代(明治以後)

注② 「虎明本」の「なる」による可能表現は一二例で肯定形は五例、他はすべて否定形である。

○「扱もくながひ名じゃ、いそがしひ時はよぶ事になるまい」(餅酒)

○「てまのいる事ならば、今日むこ入はなるまひとぞんじたれは、おもひの外やすひ事じゃ」(雞聲)

注③ 「出来る」による可能表現は表②では「卯地臭意」(天明三年一七八三年)に初めてみられるが、否定形である。

○今年も御知行へ水が出てうへ付が出来ねへそうだ。

○こっぱの上下をするがい、ひきで工面も出来ねへそうサ。

注④ 山田孝雄氏は、鎌倉時代も否定を伴うことを指摘された(「平家物語の語法」が、橋本進吉氏は、林和比古氏の掲げられた「教訓抄」(第九卷)の

○太鼓ハタシカニウタルル口傳ノアル也

○古ク被レ舞也

の例の他に

○有無の字如「世間」には不可使・仏法にあらざらむとき迷とは云はれぬべしや、仏法なる時節にかく云はる、也(「正法眼蔵」)

○仏法は感知にしらる、と習事なし(同)

○かくてもあられるよ(「徒然草」)

と、鎌倉時代における肯定形の例をあげられ、さらに室町期の○春ハ暖気ナルユヘニ大クタビレガシテネラル、モノ也(「中華若木詩抄」下)

天子ニモナラレウゾ(「史記抄」五)

肯定形の例をあげられていること、氏の「助詞・助動詞の研究」「助動詞の研究第三章受身可能の助動詞」の項に詳しい。岩淵匡「受身・可能・良発・使役・尊敬の助動詞」「品詞別日本文法講座 助動詞Ⅱ」(明治書院)

注⑤ 「ゆ・らゆ」と「る・らる」が音韻、意味共に同源であるとするのは、細江逸記氏(「我が国語の動詞の相を論じ活用形式分岐の原理に及ぶ」岡倉先生記念論文集所収)、橋本進吉氏(「助詞・助動詞の研究」)、ゆ・らゆ」と「る・らる」とは関係がなく「る・らる」は「生ル」が語源であるとする大野晋氏(「日本人の思考と日本語」「文学」昭和四二年、十二月)、「る・らる」は「あらはる・ぬる・うかる」等の接尾語の系統をひくとする佐伯梅友氏(「国語史」朝山信彌氏(「国語の受動文について」「国語国文」昭和一七年十一月、十二月、昭和一八年六月)阪倉篤義氏(「語構成の研究」一三六頁)など諸説あるが、「ゆ・らゆ」「る・らる」の職能を同じであるとする点では一致している。

注⑥ 時枝誠記氏は、「ゆ・らゆ」を辞の範疇から除外し（『国語

学原論』第二篇第三章二「ホ 辞より除外すべき受身可能使役敬

讓の助動詞」「へ 詞辞の転換及び辞と接尾語との本質的相違」、

「春めく」の「めく」「うつろふ」の「ふ」と同じく、それ自身

概念内容を表わし、常に他の語と結合している「動詞的接尾語」

とされた（『日本文法』第二章一「（二）用言及び用言相当

格ハ動詞的接尾語・（三）接頭語と接尾語ハ接尾語」）。富士谷

成章も「ゆ・らゆ・る・らる」を「あふ・やる」の類と並べて

「身」の一つとする。（『あゆみ抄』安永七年）「助動詞」である

とする諸氏の中にも「ゆ・らゆ・る・らる 及び す・さす、し

む」が他の助動詞と違っていることは指摘されており、例えば、

安田喜代門氏は、「相の助動詞（ゆ・らゆの類）」と、「態の助

動詞」にわけ（『国語法概説』）。山田孝雄氏は、「助動詞」

を否定し「複語尾」をたてられ、「属性の表はし方に関するもの

（ゆ・らゆの類）」と「陳述のし方に関するもの」とにわけられ

た（『日本文法概論』）。

注⑦ 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広共著『萬葉集』（塙書房）に

よる。

注⑧ 阪倉篤義「語構成の研究」第三章単語の認定 阪倉氏に

よれば、自動詞を作る接尾語「ゆ」の接する語基は、「二二さや」

「しづ」のときいわる語根、「四四形容詞」「五五動詞」で

あり、「一一名詞」「三三形容動詞語幹乃至は副詞の類」を語基

とはしないようである。なお、岩淵匡氏の「受身・可能・自発・

使役・尊敬の助動詞」にも詳しい。

注⑨ 橋本氏 「助動詞「る」「らる」「ゆ」「らゆ」のいろいろ

の意味は、すべて自らさうなる意味から転化したもので、その根

源に於ては一つのものである」（『助動・助動詞の研究』二八五

頁）、「ユ」は自発の意味を表わす」（福田良輔『奈良時代東国

方言の研究』第五章「第一節東国方言における四段活動詞のA列

音に付く「る」について」三四四頁）

注⑩ 時枝氏 「国語学原論」第二篇第五章敬語論（四六二頁）

「「る」「らる」は古く「ゆ」「らゆ」と用ゐられてをつたことを

考へ、更に「見ゆ」「聞こゆ」「思ほゆ」「消ゆ」「絶ゆ」等の

ゆと思ひ合す時、この語は、事物の自然的實現の概念を表したも

のではなからうかと思う。「見る」「聞く」「消す」「断つ」は

能動的意志的作用の概念であるに對し、上に挙げた動詞はそれ自

身特定の作用の表現には違いないが、それは消極的能力で、その

能力による或る事実の自然的實現を意味している。可能的能力と

自然的實現とは同一事実の表裏をなしている、国語において、

私は音が聞える（可能的能力）
私は音が聞える（自然的實現）」

注⑪ 橋本進吉 「助動・助動詞の研究」が、橋本氏までの、助動

詞承接順位の研究について詳しい。

注⑫ 渡辺夷 「叙述と陳述」『国語学』13・14輯、『国語構文論』。

口語助動詞を二種三類六グループにわけられる。

注⑬ ヘーゲルは『大論理学』第三部「主観論理学」で、否定も判

断の一であるとする。A定有の判断、B反省の判断、C必然性の

判断、D概念の判断のうち、否定の判断は、A定有の判断の下位

分類として位置づけられている。

注⑭ 三上章 「現代語法序説」。「連用修飾語」「講座現代語6」。

「主格の相対的優位」「国語学」33輯。「主語論争」「月刊文法」昭和44年11月。

注⑮ 三尾砂 「主語・総主・題目語・対象語」「口語文法講座2」。
格とは、述語となる用言によって要求された名詞の職能づけである。(中略)

(1) 主格が 処格を 発格から 着格へ 落とす。(サルが石を山の上から谷底へ落とす。)

(2) 主格が 発格から 着格へ 落ちる。(石が山の上から谷底へ落ちる。)

(1)の「落とす行動体制」は「が」「を」「から」「へ」の四つの格を必要とし、(2)の「落ちる行動体制」は「が」「から」「へ」の三つの格を必要とする。

注⑯ 渡辺実 「国語構文論」一六五頁。渡辺氏は、連用素材は統叙素材に未分析のまま内蔵されている関連諸概念を分析抽出したものであるとされて、その両者の関係を次のようにいわれる。
連用展叙が言わば分析抽出された連用素材の側から連用関係を成立させる職能であるのに対して、統叙とは、分析抽出の母胎である統叙素材の側から連用関係を成立させる職能に他ならないのである。その間の事情を仮に図示すれば



のようになる。すなわち連用関係の成立に関しては、連用成分の

側からと統叙成分の側からとの、二つの関係構成的職能が併はせ働くものと解釈される。

注⑰ 北原保雄 「文の構造―無叙と叙述との関係―」「月刊文法」昭和44年12月。「助動詞の相互承接についての構文論的考察」「国語学」83輯。

注⑱ 熊沢龍 「主部述部の原理的考察」東京文理科大学「国語」創刊号。

注⑲ 時枝誠記 「述語格と主語格」「国語学原論」三六六頁。「国語における用言の無主格性」「日本文法文法論」二六七頁。

注⑳ 加藤彰彦 「主語は述語の中にある」「講座日本語の文法2」。

注㉑ 三上章 注⑭と同書。その他「象ハ鼻ガ長イ」。

注㉒ 三上章 注⑭「主語論争」。

注㉓ 北原保雄 注⑰「助動詞の相互承接についての構文論的考察」。

注㉔ 渡辺実 「国語構文論」一七九―一八〇頁。